

インフルエンザワクチン予防接種の受け方

注意 1 予防接種を受ける前に

インフルエンザワクチンはウイルスの増殖にふ化鶏卵を使っているため、わずかながら卵由来の成分が残っています。

近年は高純度に精製されているのでほとんど問題となりませんが、卵を食べるとじんましんや発疹が出たり口の中がしびれるような強い卵アレルギーがある場合は、接種を避けるか注意して接種する必要があります。

注意 2 予防接種を受けたら



接種日は過激な運動は避けて、注射部位は清潔にしておいてください。



接種日の晩は入浴しても差し支えありません。

高熱やけいれんなどの異常反応や、体調の変化があれば、速やかに医師の診察を受けてください。



まれに30分以内に急な副反応が起こることがありますので様子を観察し、医師とすぐに連絡が取れるようにしておきましょう。



2回接種される方、または13歳未満の方は1～4週間の間隔をおいて接種しますが、効果面から4週間隔が望まれます。



次回の注射の時は、できるだけ反対の腕に、あるいは同じ腕でも前回の注射部位とは違う場所に接種を受けてください。

インフルエンザワクチンでの副反応

一般的に副反応は軽微です。

注射部位が赤くなる、腫れる、痛くなることがありますが2～3日で消失します。発熱、頭痛、寒気、嘔吐、倦怠感などもまれに起こります。

また、接種後数日から2週間以内に発熱、頭痛、けいれん、運動障害、意識障害あるいは肝機能障害、黄疸、喘息発作があらわれるなどの報告があります。非常にまれですが、ショックやじんましん、呼吸困難などがあらわれることがあります。特に強い卵アレルギーの方はご注意ください。

その他、異常な反応が生じた場合は、速やかに医師の診察を受けてください。

インフルエンザとインフルエンザワクチン

インフルエンザとかぜはどこが違うのでしょうか

インフルエンザはインフルエンザウイルスという特定の微生物の感染によって起こる病気です。

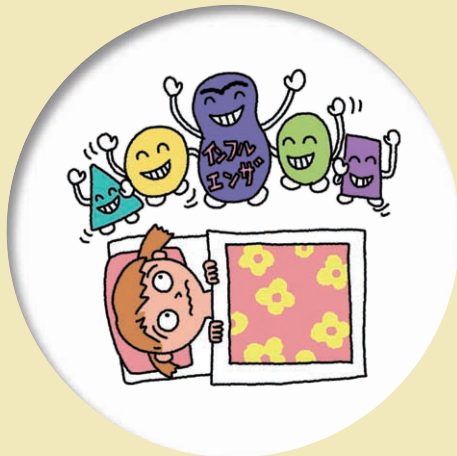
一方「かぜ」(かぜ症候群)とは、ライノウイルス、コロナウイルス、RSウイルスなど種々なウイルス感染によって起こる上気道炎の総称です。

インフルエンザでも、軽い場合にはその他の「かぜ」と区別がつきにくいですが、一般にインフルエンザの症状は重く、特に小児や高齢者、基礎疾患がある場合では重症化しやすい傾向があります。

さらに肺炎や脳症などの合併症も問題となります。ときに大流行を起こし、多くの犠牲者を出すこともあります。



インフルエンザの症状は？



インフルエンザは1～5日(平均2日)の潜伏期間の後、突然に発症し、38℃以上の発熱、上気道炎症状、全身倦怠感等の症状が出現することが特徴的です。

流行期(日本では例年11月～3月)にこれらの症状があった場合はインフルエンザの可能性が高いと考えられます。症状の持続時間は通常2～3日ですが、場合によっては5日を超えることもあります。また、高齢者や小児、あるいは呼吸器系や心臓・血管に病気を患っている方がインフルエンザにかかると合併症を併発する場合があります。

細菌の二次感染による肺炎・慢性気管支炎の増悪は高齢者などに起こり易い合併症です。

また、最近ではまれながら小児でのインフルエンザ脳症の報告が見られ、原因不明であることから病態の解明が急がれます。

ワクチン接種で予防を

インフルエンザワクチンの接種で、インフルエンザによる重篤な合併症や死亡を予防することが期待されます。

インフルエンザに対しては、ワクチンで重症化を予防することがインフルエンザに対抗する最大の手段なのです。

特に高齢者や基礎疾患(心疾患・肺疾患・腎疾患など)がある方は重症化しやすいので、かかりつけ医とよく相談のうえ、接種を受けることをおすすめします。

なお、インフルエンザワクチンでは他のウイルスの感染による「かぜ」を予防することはできません。

